

氏名	胡 実
学位の種類	博士（臨床心理学）
報告番号	甲第420号
学位授与年月日	2015年9月19日
学位授与の要件	学位規則（昭和28年4月1日 文部省令第9号） 第4条第1項該当
学位論文題目	青年期における「家族イメージ」の様相とその表現プロセスに関する検討—日中両国の青年を対象に—
審査委員	（主査）逸見 敏郎 箕口 雅博 野末 武義（明治学院大学大学院心理学研究科教授）

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成と内容要旨

[1]論文の構成

本文187ページ(A4判用紙にワープロ使用)からなる本論文の構成は以下の通りである。

I 序論

1. 青年期と家族
2. 心理臨床における「イメージ」の役割
3. 本研究立場
4. 本研究の研究方法
5. 本研究の目的
6. 引用文献

II 研究 1 青年が認知した家族成員の勢力が家族認識に及ぼす影響について

1. 目的
2. 方法
3. 結果
4. 考察
5. 今後の課題
6. 引用文献

III 研究 2 心理的環境としての家族に対する認識について

1. 目的
2. 方法
3. 結果
4. 考察
5. 今後の課題
6. 引用文献

IV 研究 3 家族イメージの構造と特性に関する日中比較

1. 目的
2. 方法
3. 結果

4. 考察
5. 今後の課題
6. 引用文献

V 研究 4 青年期の家族に対する認識と体験プロセスに関する検討

1. 目的
2. 方法
3. 各事例
 - ①日本人作成者 A
 - ②日本人作成者 B
 - ③日本人作成者 C
 - ④日本人作成者 D
 - ⑤日本人作成者 E
 - ⑥日本人作成者 F
 - ⑦日本人作成者 G
 - ⑧日本人作成者 H
 - ⑨中国人作成者ア
 - ⑩中国人作成者イ
 - ⑪中国人作成者ウ
 - ⑫中国人作成者エ
4. 結果
5. 考察
6. 今後の課題

VI 総合考察

VII 引用文献

VIII 付録

[2] 論文内容の要旨

本論文は、本文が全6章から構成されている。主要研究テーマは、日本と中国の青年を対象にして、箱庭のアイテムに投映された表現から家族イメージを読み解くこと、および、その表現のプロセスに注視し、両国青年の家族イメージについて検討をおこなうものである。一般に子が青年期の家族は、家族ライフサイクルにおいて危機の時期と言われることがある。また家族は文化的特性

を内包した集団であり日本と中国の青年それぞれが、自身の文化のなかで家族イメージを内在化しているかについて、明らかにすることは、家族心理学にとっても心理臨床にとっても、意義があることと言えよう。

本研究の研究方法として、被験者の家族イメージを重視している。それは、個人の思考・記憶・学習といった心理的活動とその根底にある個人の主観的な感情・情動、認知などを結びつける役割としてイメージがあるということができる。従って、個人のイメージの世界を手がかりにすることによって、個人が現実を心の中でどのようにとらえ、認識しているかを理解するための手がかりとなるのである。そして、個人のイメージを外在化する様式としてあげられる「イメージの視覚像の表現(言語によるものと描画や箱庭など非言語的表現によるもの)」(河合、1971,1997)を本研究では用いる。

以下に各章の概要を示しつつ、本論文について概説する。

I 序論

本研究の研究上の立場を明確にするために、日本及び中国における青年と家族について概観し、また心理臨床におけるイメージの機能と役割について研究史を整理した。特に心理臨床で用いられるイメージとそれを外在化し、把握するツールとして箱庭療法で使用される箱庭用具(各種ミニチュア)を使用することの蓋然性について、SD法、家族関係単純図式投影法、家族イメージ法(FIT)、Family System Test (FAST)などと比較検討のうえ明らかにした。

従来の研究では見られない国際基準サイズの砂箱のなかにミニチュアを置くという箱庭用具を本研究のツールとして使用する理由は、①砂箱という一定の空間の枠を作り出すことで、イメージ表出を促す、②砂に触れることで適度な退行が生じ、イメージ表現の賦活化につながる、そして③3次元の多様なミニチュアから自分のイメージに合致したものを使用し、物語を形成しやすい、という3点からである。

以上の先行研究および諸概念の整理を受けて、本論文の目的は、日本および中国の青年が自分の家族に対してどのようなイメージを抱いているかについて、質問紙およびイメージの表現媒体として箱庭用具を用いて家族イメージの内容およびその表現過程を分析し、明らかにすることにあるとした。

なお、研究に用いる中国語質問紙については、日本語版をもとに中国語に翻訳、さらにバックトランスレーション法により、表現の一致を確認したものを使用した。

II 研究 1 青年が認知した家族成員の勢力が家族認識に及ぼす影響について

日本と中国の青年を対象に、青年が自分の家族成員の決定力や影響力をどのように認知しているかについて明らかにすることを目的とした。日本の青年は大学生 167 名(男性 64 名、女性 103 名)、中国の青年は大学生 170 名(男性 84 名、女性 66 名)を対象として、家族構造測定尺度(野口ら,2009)および家族機能測定尺度(Olson,1985)を施行し、家族機能測定尺度の適応性を基準変数とし、家族構造測定尺度の「父親勢力」「母親勢力」「子ども勢力」「結びつき」「葛藤」「ルール」を説明変数としてステップワイズ法による重回帰分析を用いて解析した。

その結果、凝集性および適応性に関しての適合度指標はともに十分な値が得られた。すなわち、日本の家族は父親勢力が強いと家族凝集性が高まるが、一方で、父親が権威的態度をとったり、家族に理不尽な指示要求を繰り返すと家族関係にマイナスの影響を及ぼす可能性が示唆された。また中国の家族は、父親は家族内ルールを規定し、意志を反映させるなど家族への影響力が強いことが明らかとなった。

III 研究 2 心理的環境としての家族に対する認識について

日本と中国の青年の家族への印象が家族に対する評価に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。日本人青年は大学生 139 人(男性 54 名、女性 85 名)、中国人青年は大学生 140 人(男性 78 名、女性 62 名)を調査対象とした。質問紙として小倉(1990)、麻喜(2010)を参考に独自に作成した家族の印象を捉える 26 個の形容詞対からなる SD 法による家族印象尺度、および家族環境尺度(野口,1991)を使用した。

結果の処理は、家族印象尺度は因子分析(最尤法、プロマックス回転)をおこない、その結果として日本青年と中国青年ともに、「居心地のよさ」「力動的」の 2 因子が得られた。また家族環境尺度に関しては、国と性別の 2 元配置分散分析をおこなった。そして、日本および中国の青年は共に、家族への認識がポジティブであるほど、親密的であり、また家族としての活動が活発であると評価していることが明らかになった。しかし日本の青年は家族に対する印象が高いと、家族内の知的文化的志向が高いと評価するが、中国ではそのような点は見られなかった。

IV 研究 3 家族イメージの構造と特性に関する日中比較

日本と中国の青年がもつ力動的な家族イメージを明らかにするために、投映法調査である家族シンボル配置法の FAST(Gehring, 1985:Family System Test)、家族関係単純図式投影法(水島, 1981)、家族イメージ法・FIT(亀口, 2003)をもとにしながら、家族内のシステムと家族外部のシステムとの往還関係を測定するために、筆者が開発した「家族イメージシステム法」を使用した。また家族間

の結びつきの強弱について、7段階での評定を求めた。調査対象は、日本人青年が大学生30人(男性5名、女性25名)、中国人青年が大学生30人(男性12名、女性18名)である。家族システムの枠を記した画用紙上に動物のミニチュアを配置していく家族イメージシステム法は、個別面接調査であり、調査施行は筆者が全て行った。

結果の処理は、使用された動物の数、動物に投映された家族成員数、置かれた動物が示す方向などを計測した。次に家族の結びつき得点について国および性別の2元配置分散分析をおこなった。そして、使用した動物数、動物の配置、家族の結びつき得点に日中間の差異が見られた。この差異は、青年がイメージする家族の範囲が異なる、即ち日本は直系血縁家族であり、中国は直系また血縁関係外の関係者を含めた複合家族であることが示唆された。

なお本章は『家族心理学研究』(2013, Vol. 27, No. 2, p. 111-122)に掲載された論文に加筆修正したものである。

V 研究4 青年期の家族に対する認識と体験プロセスに関する検討

研究3までを総合し、投映法を用いて青年が家族イメージを生み出す体験プロセスを質的に明らかにすることを目的とした。調査には、研究3で使用した家族イメージシステム法をもとにして、よりイメージを喚起しやすくするために、箱庭療法で使用される用具の立体的なアイテムと砂箱を使用した、「家族イメージ配置法」を考案し施行した。調査は、日本人青年は大学生8名(男性3名、女性5名)、中国人青年は大学院生1名、社会人3名の計4名(男性3名、女性1名)を対象とした。箱庭に家族をテーマとしてアイテムを配置し、その後に家族について半構造化面接法により内省を求めるという設計のセッションを原則1週間間隔で10回おこなう設定で、調査をおこなった。なお調査はすべて筆者が施行し、対象者の了解のもとビデオに記録した。

結果の分析は、①作品全体に展開される家族のテーマ、②家族成員を表現するアイテムの種類、③作品をとおして得られた家族や本人についての気づき、の3点を筆者と家族心理学に造詣の深い臨床心理士1名とが別個に評定した。分析指標①および②に関しては、2名の評定者の内容的一致は約85%であった。また不一致の点については、2名で協議し、調整をはかった。

その結果、①作品全体に展開される家族のテーマについては、両国の青年ともに、「家族の具体的な出来事の回想」「心に描いたイメージ上の家族」に大別できた。②家族成員を表現するアイテムの種類については、「家族の過去の思い出や現状の再現がモチーフ」になっている場合は、人形アイテムが使用され、「イメージ上の家族を表現する場合」は動物アイテムが使用される傾向が、両国の青年ともに認められた。③作品をとおして得られた家族や本人についての気づ

きについては、両国の青年共に「自分自身について」「家族成員について」語られるものに大別された。また、対象者が10回のセッションを行う過程のなかで、前半よりも後半のセッションのなかで、イメージ上の家族を表出する傾向が顕著となることが明らかとなった。

VI. 総合考察

研究1から研究4は、日本および中国の青年が、家族に対するイメージを認知的側面、投映的側面から把握することに多様な測定用具を用いて、多面的に把握することを試みた。その際に、家族イメージを喚起するためには、「家族イメージ配置法」として考案した立体的アイテムを使用し、複数回のシリーズとして調査することが効果的であるということを示した。

また青年期のテーマである家族からの分離・独立に関しては、質問紙調査の中ではあらわれないことがなかったが、研究4の家族イメージ配置法のなかでは両国の全ての対象者が、10回のセッションのいずれかの回で取り上げていた。これは、同一の調査者が継続的にひとつのテーマで調査を重ねたという調査状況も影響していることが窺える。これは家族イメージ配置法が心理臨床の場でも活用できる可能性を示唆するものである。

Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

青年にとって、家族は依存の対象でもあり、また自立の流れの中で離別することが余儀なくされる対象でもある。従って青年期の家族関係は、青年にとってアンビバレントな感情体験を余儀なく迫られるものであるといふ。本論文は、このような青年期の家族関係を、青年が認知する家族イメージの側面から量的および質的に明らかにすることを目的とした。同時に本論文の二つ目の特色は、日本と中国と2カ国の青年を対象にして、それぞれの文化的基盤のなかで、青年の家族イメージを示したことにある。

青年の家族イメージについて第Ⅱ章および第Ⅲ章では、質問紙を用いて数量的に分析をおこなった。まず第Ⅱ章では、家族の構造および家族の機能を測定する尺度を用いて家族成員の力、パワーを日中両国の青年がそれぞれどのように認識し、またその力関係が家族にどのような作用を及ぼしているかについて明らかにした。第Ⅲ章では、日本と中国の青年の家族への印象が家族に対する評価に及ぼす影響について、家族の印象を測定するSD法および家族環境を測定する尺度を用いて、日本および中国の青年は共に、家族への認識がポジティブであるほど、親密的であり、また家族としての活動が活発であると評価していることを明らかにした。質問紙調査をとおして、日中両国の青年の家族に対する認知を家族構造や家族機能、そして家族環境と家族を複数の下位カテゴリーに基づき検証し、その連関を明示した点は意義深いものと言えよう。

さらに第Ⅳ章および第Ⅴ章では、質問紙調査では把握できない心像を把握するために、投映法を用いた調査をおこなった。家族を対象とする投映法調査は、家族シンボル配置法や家族関係単純図式投影法など開発されているが、第Ⅳ章では、既存の方法に対して家族システムは家族内および家族外のシステムに開かれていることに着目して、平面上で家族システムの開放性を重視した家族イメージシステム法を開発し、施行した。そして、日本および中国の青年がイメージする家族は、家族の範囲が異なることを臨床心理学の視点から明らかにした。この点は、心理臨床場面において、家族の問題を取り扱う際に重要な知見となることが十分に推測できる、意義深いものである。さらに、第Ⅴ章では、平面での第Ⅳ章の投映法調査をもとに、より実際の家族のイメージを投映することができるように、箱庭用具に着目した。箱庭用具は、人物や動物、家や家具などのミニチュアなどと砂箱から構成される。そして、砂箱のなかに、研究協力者は、教示にそって自由に家族イメージをミニチュアを使用して配置することができる。家族に対する投映の自由度が高い中で、家族イメージを測定するこの調査方法は、家族イメージシステム法をもとに検討され「家族イメージ

配置法」として、各研究協力者にひとりに対して10回を施行し、家族へのイメージの変化と特徴を明らかにした。家族イメージ配置法は、家族イメージを喚起しやすい方法として、開発されたものであるが、その中には家族システムのアセスメント機能が包含されている。従って、心理面接初期のアセスメントに用いる可能性も示唆しているといえよう。加えて、日本人青年8名、中国人青年4名の研究協力者に対して延べ数にして120回の調査面接を実施したことは、質的な調査方法として十分に丁寧なデータ収集を行ったと評価出来る点である。加えて、結果のひとつとして10回の調査のなかで後半にイメージ上の家族が表出する傾向が顕著となることを示したが、これは他の投映法調査においても防衛的表出を検討するために、複数回の施行をする必要性を示唆するものであり、今後のこの領域の研究に重要な知見を示したといえよう。

総合的にみると、家族心理学の領域に青年の家族イメージをとおしてみた家族を検討した点、日本の青年と中国の青年を対象として、アジア圏内という限定はあるものの国際比較の観点を導入した点、そしてイメージの測定をするために投映法を導入した点の3点において、新たな視点を提示した研究である。

(2) 論文の評価

当委員会は、次の点から本論文を十分に評価に値するものとした。

- 1) 質問紙調査だけでなく、投映法を用いて日本および中国の青年の家族イメージを明らかにした点は、オリジナリティがあり、評価できる。
- 2) 第Ⅲ章、第Ⅳ章で報告されている研究結果は、いずれも興味深いものである。特に、青年がイメージする家族成員の範囲が日本と中国とで異なることを臨床心理学の研究手続きを用いて明示したことは、家族を対象とする研究にとっては重要な知見であるといえる。
- 3) さらに、この研究から導き出された結果は、心理臨床の実践においても、家族をテーマとしたクライアントに対しても、活かすことができる知見を内包しているといえる。

なお、箱庭用具を調査ツールとして使用することへの検討が、やや一面的であるなど課題が見られるものの、本論文が申請学位にふさわしい成果をあげているということについては、当委員会の一致した結論であった。

また審査委員会は、審査の過程で申請論文の完成度をより高くするために、「博士学位申請論文修正に関する申し合わせ」(2008年2月18日)に従って、申請者に、第Ⅰ章序論の表現を明確にして記述すること、引用文献リストおよび表記方法の再確認、2点の修正を求めた。申請者は、最終審査会までにこれらの要求に応える修正を完了し、審査委員会はこれを了とした。